せたかむい
発行・古平町史編纂室
文化会館☎42-2590
第181号・16-10-1

年表で読む 古平の歴史

《87》

サバ漁

■「サバを読む」

近頃、サバ漁の方はさっぱり話題になることがないので、まずは**ことわざ**から――

読むというのは数えるという意味で、「**物を数えるとき、自分に都合のいいように数をごまかすこと**」をいう。

これには諸説があるが、

① サバを市場で売りさばくときに、昔は重量ではなく数で魚を売っていたので、魚市場の売人が独特の節回しで、しかも非常に早口で数えるので、途中で数をとばしても買う方は分らなくなってしまう。後で数えてみたら数が足りなかったという。

② サバは腐りやすいので、素早く売りさばく必要があったため、かなりいい加減な売り方をした。

③ 大漁のサバを漁獲すると、数が多いので使用人がその数をごまかした。

④ サバの調理法に刺鯖（さしさば）というのがあり、背割りにしたものを二枚重ねで一連と数えることから、それが転用されたのだという。

こんなことがその語源だろうといわれているが、この言葉は日常、たわいのないことにもよく使われる。

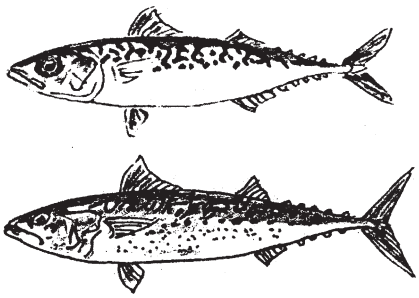
■さばの種類

わが国でサバといわれるのは二種類で、マサバとゴマサバである。ゴマサバは南方に棲んでいて北海道では見られない。統計上ではこの区別がないが大部分はマサバである。サバは、魚体の色から青色の魚の代表として鯖と書く。

●**マサバ**　真鯖、本鯖、平鯖

●**ゴマサバ**　胡麻鯖、丸鯖

中国では青魚と書き、鯖といえば鯉のことである。



マサバ（上）とゴマサバ（下）

■記録が少ないサバ漁

明治になってもサバを主体にした漁が行われたことはなく、サケ漁の切り揚げる頃になると小サバや中サバが網にかかり、それを利用する程度であった。

俗に「**サバの生き腐れ**」といわれるように、生きのさがらないうちに早く調理しなければならなかったが、せいぜい生干しか、塩蔵するぐらいでおかずとしていた。

その頃は、当然のように鰊漁などいくつかの漁に限られ、その他は雑漁としか見られていなかったようである。

古平では昭和一〇年代になって、ようやくサバ漁が盛んになったようで、ほかの魚種のような古い時代からの記録がない。

■サバの調理法

その頃の調理のひとつの方法が**鯖すし漬け**で、保存食として家庭で作られていた

が、当時は酢の値段が高かったので、一般家庭で普通に作られているという調理ではなかったようである。

明治二二年（一八八九）、浜町・名達文吉日記にその作り方が記されている。

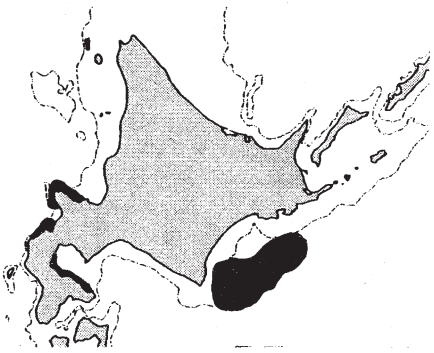
原料のサバ三〇〇尾を二〇度（二〇ジ）の塩水に一時間漬ける。酢一升二、三合を二〇分間沸騰し、これに酢酸（さくさん）三ジを入れて冷ます。この液にサバを三〇分間入れておく。別にモチ粟（アワ）三合とウル粟七合を混ぜて蒸す。これを大きな半切り（はんぎり＝すし飯用の浅い桶）に移し、サバを入れてある器に移して冷ます。このときナンバンかショウガを加え、これを箱に詰めて上から充分に押さえる。このようにして作ったものは大変美味である。貯蔵日数はおよそ五ヶ月である。」

■サバの生態

サバは南から北へと沿岸を回遊しそれを繰り返している。冬から春にかけては南方の海域で越冬すると、産卵しながら北上し、春から秋には北部の海域で活発に餌をとる。

サバの成魚は沖合いを回遊するが小さいうちは沿岸に分布していて、昔は一本釣りで漁をしていた。

北海道日本海岸には六月か七月頃に産卵に来て、産卵が終わると、盛んに餌を食べるようになり、それが秋頃になって、体中に脂がのってきて味が良くなる。



北海道におけるサバの漁場図
「北のさかなたち」より

群れの中にはオホーツク海へ回遊するのもあるが、一〇月から一二月頃には越冬のため南下し、北海道水域からは姿を消してしまう。

昭和一〇年代には、沿岸を回遊する未成魚の群れが、古平港の防波堤の近くにまで寄って来て、ちょうど盛漁期のイカのゴロを餌にして、夏休み中の子供や大人達が大いに釣りを楽しんだという時期もあった。

サバ漁には夏と秋に漁獲があり、夏サバ、秋サバといわれ人気が高い。以前だと大サバは鮮魚、小サバは魚粕や養殖の餌になった。

■サバの生長

サバは回遊魚のなかでは成長が早く、年齢が二、三歳で成熟する。体長が二〇～二八センチになり、五年で三三～四〇センチになる。

寿命は一〇年くらいだといわれ、成魚はイワシ、アジ、イカなどを食べるが、好物はアミ類だという。サバの胃袋を開いて見ると、入りきれぬ程の餌がいっぱいで、ときにはサバ同士の共食いもするドン欲な魚である。また、サバはカツオ、カジキ、サメなどに捕食される。

ここでも食物連鎖（しょくもつれんさ＝食う、食われるという食物関係によってできる、生物の種類によるつながり）のきまりが厳然としてある。

特に大サバはマグロにとっての大好物で、昭和の初め頃から活きたサバを餌にしてマグロの縄釣りが行われ、この漁法で大漁だった時期もあるというが、現在はルアーによる釣りも行なわれている。

■古平のサバ漁

サバをとる漁法は後になって古平に入ってきたようで、大正八年からは漁獲の記録もあるが、余り重要視されていなかったのか外の漁業から見て資料も少ない。

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
【82】

大正一二年

▼四月一六日

今日も入船町から群来村方面が大漁、〆などは毎日の漁だ。熊さんも〆へ行く。学校も七日間の鰊休みが終わって今日学校へ行ったら、また七日間の休みになったと言って早く帰って来た。刺網は沢江、浜中方面が良い。リンゴの枝切り今日も来る。午後二時頃、港町の今さんから、〆種田からの依頼で、農園に粕を干したいが貸してもらえないか、という申し込みがあった。畑まで粕干しに使うというのは初めてだ。〇一からも頼まれていたので、〇一には三角畑を貸すことにした。今さんと畑を見に行ったが、畑にはまだ雪が一尺程もある。畑を決めて、謝礼は鰊を保津船（ホツセン＝幅一・七メートル、長さ九メートル程で、大きさは磯舟の幅、長さともに二倍程ある）で一隻分とのこと。実に割の良い賃貸料なので承知する。幸治らはこの日も一モッコ以上の鰊を拾って来る。この朝、㊥歩方と入キが、群来村の熊木漁場を借り二〇杯以上も獲ったというので、歩方連中は大喜びだ。群来村方面の大漁には実に驚き入った。

▼四月一七日

今日もまた入船町から群来村にかけて大漁〆、種金、㊥〆、㋑、その他、群来村までの一帯が大漁。歌棄方面は二、三杯、前浜は皆無だ。どうも今年の鰊は漁が片寄り過ぎて困る。妻とコノさんは鰊割き。昨日、約定した賃貸料の鰊、種金からもらうことになり、小川の船で鰊汲みに行くつもりだったが、少し波が出てきたので見合わせる。午後から小雨の降る中、港町から入船町方面へ行って見たが、入船町辺りはどこも鰊の置き場もない程の大漁だ。鰊の処分に困っているという。帰途、㊥に寄り夜食を馳走になり、風呂に入れてもらい九時頃帰る。浜はモッコしょいで賑やかだ。

▼四月一八日

今日は朝から雨降りで、熊さん、コノさんは鰊つぶしをやる。どこの家でも今日は鰊つぶしや鰊割きをやっている。㊥へ昨日、アバ縄を三〇〇丸注文したら、今日の午後「シヨウチシタ五〇〇エンタノム」と電報が来たので、早速、銀行へ行き五〇〇円送金した。㊥では、鰊を保津船一隻買ったといってモッコしょいをやっている。製品にしたら一〇本余りになるから四〇円とは安い。

▼四月一九日

朝からまた雨が降り出し道路も悪い。悦三はくつをはいて外に出ては転んで、泥んこになって帰って来る。鰊漁は無し。熊さんも休みで、煙筒掃除やら、鰊を架ける納屋造りをしている。リンゴが品切れで困っていたが、㊥から49号二〇〇斤、9号二〇〇斤を買う。毎日三円くらい売れていく。浜中歩方や刺網は、不漁に加えて網の流失で大変だが、手間取り連中はいい収入になった。大抵のところでは七、八本は架けたろう。港町の山川が来て、畑に積んであるポプラを釜炊きに欲しいので二敷程売ってほしいと言う。現金で買って行った。これも大漁のおかげだ。

▼四月二〇日

起床七時、昨夜は時化模様でも投網したのだが、鰊はさらに無し。朝のうちは雨で道路も悪かったが、一〇時頃から晴れて風も吹き、これで鰊の乾きも良いだろう。妻、熊さんとコノさんは納屋へ行って鰊割きをする。私は店番。リンゴが四円五〇銭売れた。中庭の雪も全部消えて広々となった。風は次第に強くなってきて、沖には汽船が三隻避難している。しかし、鰊を干すにはよい風だ。早今日あたりから樺太の漁場へ出稼ぎに行く人もいて、竹ごうりなどが売れる。鰊漁も八、九分通り終わって、気の抜けたような気がする。何と言っても、一五日あたりまでが一番大事な時期だと思う。岩内、古宇方面の不漁は何十年来とのことだという。一月に大カ

メを捕らえたからだとか何とか、縁起をかついで大ガメの供養祈祷をしたとか、新聞を見ると笑い事ではない。実際に気の毒なことだ。積丹も近年にない不漁とか。夜になって風が静かになった。

▼四月二一日

今日は帆船が五隻、和船一隻が停泊している。

▼四月二二日

起床七時、今日は海も静かで、鰊漁あらんと起きて見れば一向に無い。何やら気抜けしたようだ。このままで終われば不景気だ。積丹は不漁、美国は五、六杯獲ったとのこと。若林さんのところも五か統で五〇〇石ぐらいとは、実に困ったものだ。どうにかして後ひと漁あってほしい。小林校長が今日、余市大川小学校へ転任されるとの通知があったが、七年在任、惜しむべき人だ。

▼四月二三日

天気快晴、鰊漁さらに無く、町の鰊景気も薄らいだ。樺太へ出稼ぎに行く人の数が目立つようになった。鰊漁はもう終漁だ。種金では馬車に玉粕を積んで、畑へ運搬している。熊さんは、農園へ鰊のうろこや笹目を運ぶ。リンゴは今日は一〇円余りも売れた。

▼四月二四日

鰊漁〆の一五、六杯を筆頭に、丸山岬方面だけで二〇〇石獲れた。今日はいやなダシが風が吹いて気味が悪い。午前中、㊐床屋で散髪してから、鶴間に寄り話をして一一時帰る。午後一時から火防組合で巡回する。私は浜通り、一条通りを廻り三時に帰る。リンゴも少なくなったので、㊐から二〇〇斤仕入れる。ずい分売れる。㊐の大阪のおじさんが今日、久し振りにお出でになる。夜、㊐へ行きいろいろ大阪や東京の話などを聞く。今日獲れた鰊を見たが、まだ形も相当によい。この分だと、あと一回くらいは来そうなものだ。

▼四月二五日

起床六時半、今日は珍しい程静かで、そして上天気だ。鰊漁の時期はいつも風が強いが、全く風が無い。鰊漁も一日ごとに寂しくなっていく。午後から農園へ行って見たが、一〇日程も見ないうちに雪はほとんど消えた。種金の粕干しに七、八〇人の出面が出てムシロを広げ、盛んに粕干しをやっている。農園で、切ったリンゴの枝やゴミなどを燃やす。馬車が玉粕やムシロを満載してどんどんやって来る。漁業家もこんなに大漁して、大仕掛けでやれれば面白いだろう。聞けば五か統で六、〇〇〇石の水揚げがあり、外にも枠で一、〇〇〇石程売ったという。何とよい場所だろう。まるで殿様のようなものだ。また反面では、前浜の歩方などは、せめて七、八杯ほしいところなのに皆無の状況で、皆青くなっている。ずい分差のあるものだ。あちこちと見廻り一一時に帰る。上天気で粕干しには絶好だ。店は延縄道具の売れ行きがポツぽツ。夜、㊐へ行き大阪のおじさんと、繁夫さんのことなど色々話をする。静かで穏やかな夜だ。

▼四月二六日

種金から農園へ粕をどんどん運んでいる。出面連中も大勢出ていて景気がよい。鰊製品のうち身欠きがポツポツ取り引きされ少し金が廻る。刺網漁夫として熊石辺りから来ている人達、明日あたりから帰るところもあり、浜方は日増しに寂しくなる。

▼四月二七日

朝から暴風が激しく、砂塵を飛ばして恐ろしいようだ。火防組合では火を警戒している。港町のタラ釣り船もずい分困難しながらようやく入って来る。途中で一隻が水船になり、他の船に助けられたとのこと。また、磯船のカレ網、一人乗りが流されて大騒ぎになる。㊍から買い付け中のアバ縄、高くなったので現金でなければ値を直すという。どうするかと電報がくる。父と相談し、銀行から一時借り入れることにした。夜、このことについて返電をする。暴風は夜になっても続く。

▼四月二八日

昨夜来の暴風も今日はようやくなぎ、上天気になった。これで粕干しの連中も大喜びだ。身欠きも早いものから納屋下ろしが始まっている。仲買人連中も忙しそうに歩き廻るようになり、町中は今までの海戦から陸戦に移りつつある。中村校長が九時の富丸で出発されるというの、

で、八時に学校へ行き挨拶をし、浜で見送る。大した送り人だ。小学生が唱歌を歌ったが、一同、名残惜しいやら寂しいやら。はしけに乗り本船へ向かう間、ハンカチや帽子を振り別れを惜しんだ。母の命日で、禅源寺の和尚さんが来られる。いろいろ話をし、一一時頃帰られた。後㊥へアバ縄の件について電報を打つ。入船町、丸山町方面を廻ったが建網、刺網、手間取りの連中共に大々漁で、何一〇年来の景気とのことだ。刺網の注文の申し込みがある。大いに活動せねばならぬ。四時帰る。夜、㊥で火防組合の集まりがあり、火防ビラを書くのを依頼される。自転車を修理に出していたが、今日出来てくる。

▼五月一日

ようやく雨も上がったが、鰊場も寂しくなった。はや前浜の大久保歩方などはあきらめて揚網したという。昨年と今年、二年続けての大不漁に、もうコリゴリしたと言っている。大漁したところもこの頃の天候、雨や暴風には困っている。朝、店のこたつを取り外して掃除し、新しい机に向かえば気分もすっきりする。正午、入舸の㊥漁場の漁夫が三人来て、ロープや綿糸類を持って行く。漁況を聞いたところ、来岸から入舸にかけては惨めな漁だったとのこと。㊥では穴潤一か統五〇石、野塚も四、五〇石とのこと。しかしこれはまだ上の方で、入舸の斉藤では四か統で二杯、外の一か統では三杯、甚だしいところでは賄いにも足りないとのこと。刺網連中も悪かったとのことだ。実に気の毒なことだ。それから見れば古平、美国、余市はまだ上の方だ。そろそろ身欠きや胴鰊などの売買があり、高値が付いているとのことだ。今日も刺網の二軒から四、五〇円の入金がある。年々早く入金するようになったがよいことだ。夜、父は㊥と崎長の娘さんの通夜に行く。

▼五月二日

いよいよ若草の萌え出る好季節となった。歩方の二、三か統が切り上げになり、店ではロープや綿糸などが売れていく。いよいよ本年の海戦も幕を閉じたか。前浜の歩方連中は実に気の毒だ。海産物の商戦に入ったのではかりが売れる。㊥に行き、貸し方について話をする。夜、㊥支店へ行き、来る七日の火防宣伝行列についての相談をする。署長外役員一八名でいろいろ協議し、事務分担などを決め、一一時頃帰る。鰊製品の値段、未曾有の暴騰ぶり。粕三、六〇〇円、数の子一六、〇〇〇円、身欠き・上三円五〇銭とのこと。浜方の景気も、この値段でどうにか愁眉を開いたようだ。

▼五月三日

昨夜二時頃、妻が少々産気があると言っていたが、今朝まで無事であったので、早速、七時頃産婆さんを呼ぶ。とにかく近いとのことでその準備をする。港町の姉にも連絡して来てもらう。農園へ行き、あと五日くらいで畑を空けてもらうよう話をする。粕干しに一〇〇人以上も来ていて賑やかだ。このところの天気で仕事もはかどっているようだ。枝切りの職人と、熊さんが農園の仕事をしているがこの天気で仕事もはかどっているようだ。枝を切ったあとの木はさっぱりしている。小樽㊥の鬼頭さんが来られる。いろいろと商談をし、昼食後、また話の最中に突然「オギャー」という声が聞こえた。男児だった。妻もいたって元気で何より安心した。床に就いてから一時間程での安産だった。早速、国元の㊥へ電報で通知した。帰途、㊥に寄り話をして五時帰る。

▼五月六日

妻も安産後の肥立ちも良く、赤児も元気で何よりだ。港町の姉がずうっと来てくれているので大助かりだ。こんな時は兄弟や親戚は心強いものと感じた。店ははかり、綿糸、荷かぎなどが売れる。このところ珍しいような暖かさで、桜も咲きそうだ。一一時頃、㊥木戸さんが来ていろいろと商談をし、二時の船で帰られた。鰊粕類も、樺太が大漁とのことで少し下落の気配とのこと。数の子は天井知らずで、一本（六斗入り＝約一〇八リットル）が一〇〇円から一一〇円とのこと、浜方では好況で人気が沸騰している。

（続く）

秋ひとり漫歩

大澤文子

だれが仕舞い忘れていったのか、わが四畳半の片隅に投げだされたようにアルバムがひとつ。何気なく朱い表紙を繰ってみた。

あーそれは何処かで小さい秋を見つけようと、写真機片手にでかけたときの写真集だった。その写真集に『秋ひとり漫歩』と私は名づけた。

あー あの時――

＝久びさに秋の空は高く晴れあがり、積丹・余別ゆきのバスは男女学生で満員、はちきれそうな荷がビッシリ、足の置き場もせばめられ、揺れるバスの中で身を支えるのがやっとだった。

女子学生のひとりが座席でかるく会釈した。

「立たせてゴメンナサイ」

とでも言っているかのように。

「いいの次でおりるから・・・」

私もかるく会釈して、次の丸山町でおりた。

バスはひとりをおろし発車した。後部に積まれた学生の大きな鞄がガタンと揺れた。

そうだ、参道を登ってみようかな、きっと小さい秋を見つけられるかも知れない。

汗ばむ程の太陽のもと、私は参道めがけてゆっくり足を運んだ。

ゆふすれば大根の葉にふる時雨
いたく寂しく降りにけるかも
（斉藤茂吉）

いつか私は大好きな短歌を口遊んでいた。

その時、異様な物音と共に、カラスの一群が唐突に羽音をたてて飛び発った。

ギクッとして一瞬足をとめた。

やや心を落ち着け左方の懸崖に目をやった。うっそうと繁る緒樹々は参道を覆うかに伸びのびと枝をのばしている。

「いいなァ」

小さい秋はここにも・・・・。

ふとかすかなせせらぎの音に耳をすます。うす紫の野菊と、沢おぐるまの黄に被われた細い小川のせせらぎの音だった。

はや虫のすだきもとぎれとぎれ聞こえる。みぞそばの花は参道まではびこり、可憐で美しい。キラリ！小さい光を感じた。ハッとして眼を見ひらく、どこからくるのであろう。岩清水のしたたり落ちる水の光りだった。

見上げる崖の半ばに熊笹が生い、枝垂れ萩の咲くかげにひそかな笹鳴りの音が・・・・。

ああ、ここにも小さな秋が・・。

フーッと安らぎを覚え深く息づいた。

右方の崖下には真新しい何軒かの家があり、垣越しに見える庭畑には秋菊とコスモスが真っ盛り。

美国町に通じる山道には、道をせばめてコスモスの花が咲きみだれていた。

大好きな『水原秋桜子編・季語集』には、コスモスの花のことがのっていた。茎も葉も繊細で花は白・紅・うす紅と種類が多いと・・・・。花言葉は華麗・繊細・薄情でちょっぴり気のつよいところがあり、何にでも挑戦してゆける気丈な女性・・・そんな花である・・・・と。

ひとりでブツブツおしゃべりしながら、ようやく境内近くに入った。

突然！　ナナカマドの大樹の上から朱実のついた小枝を器用にくわえた磯ガラスが、ひとをバカにしたように私を見下ろし騒がしく鳴きたてる。

カラスに用心しながら鳥居をくぐった。昼も尚うす暗く、うっそうと繁る丘を背に、青い毬（いが）をつけた栗の大樹が四、五本、身の引きしまる思いに足をとめた。

その時、突然

「あらァ！」

社務所の玄関口から明るい声がした。

とうとうお邪魔するはめとなった。コーヒー、果実等々。

温かいおもてなしを受け、最後は相変わらず短歌のことに触れ小一時間。

スヱ夫人に見送られ、社務所を辞したのははや夕暮れ。

「秋桜のうた」を口ずさみつつ、岩清水のしたたり落ちる参道をおりた。

あー「秋 ひとり漫歩」

チョッピリ感傷的になりすぎたかなァー。

―札幌通信 第22信―

台風と海の想い出

吉川義雄

毎年のことではあるが、日本の南部を通過しては、それ相当の爪痕を残酷に残して行く台風のニュースも、テレビ画面を通して報らされると胸が痛くなる。

札幌という街は、不思議な程天災の少ないところである。珍しく台風一六号とかが日本を縦断して、北海道まで駆けあがって来るという予想天気図を見て、ある程度の覚悟を決めて待機していたのだが、夜半に強い風がほんの少し窓ガラスを鳴らしただけで終わった。

古平時代の少年期や、戦後の十年、日本海特有の荒波が海岸に押し寄せ、必死に船を護ったことが思い出される。

台風報道のテレビ画面に、荒波が何波も防波堤に打ちつけては、天高く白柱が舞い上がってゆく大自然の壮観は、風雨の中でそれを体験した者でなければそれは分かるまい。

親父と二人で波しぶきを被りながら、大切な船の舫い綱（もやい づな）を再点検したものだ。画面を観ていると、大波の下でのそれぞれの生活実感が、札幌の静かな夜にいても、思わず頑張ってくれと叫びたくなる。

戦時中一年程、四国と九州の海軍航空隊にいたのだが、ただの一度も台風に襲われた覚えはない。

その変わりみたいに、南方に出撃する途上、鹿児島湾を出てやたらに長い種子島を通過したとたん、いきなり台風が襲って来た。

私の乗った一万トン級の重巡「鹿島」でさえ、キリキリ舞いする程の大波だから、それを護衛する駆逐艦「梅」と「桃」は哀れなもの、しぶきを浴びながら望見できるのは、とてつもない大波の間から時々マストが見えるだけの難行苦行。

漁師の倅でも、海の上での体験と言えばせいぜいサンマの手掴み漁と、ホッキの手繰り漁、それにイカつけ。親父が何としても長男を漁師に仕立てたくて、引っ張り出しての体験だから身の入らないことおびただしい。ついに親父もサジを投げてあきらめたことは確かだ。

舟に乗って、少しの波でもすぐにゲーゲー派手に小間物屋を開く私でも、軍艦となればいさか訳が違ってくる。軍服を着て、部下達もいる。遊びどころか、戦いに行く途中でもある。その通りだぞ・・・と、少し波浪の収まったトタン、

「左前方ッ雷跡ッ」

けたたましい声と共に、艦内に戦闘ラッパが鳴り響いた。

魚雷の発射されたあたりに無数の爆雷が投下され、水柱が二列に並んで、次々に陽の光りの中で美しく輝き、そしてくずれていった。

☆　☆　☆

戦争が終わり、ジャワやスマトラあたりまで行かずとも、お前みたいな奴はそこに居れ。と海に嫌われたらしく、たった一回の航海で、台湾に終戦まで居つくことになった。

台南航空隊所属になって、途中立ち寄って来た沖縄が日毎に占拠されていく姿を、隊の長距離偵察機が毎日のように写真に撮って来た。

おびただしい数の敵艦や輸送船が沖縄本島の周辺に航跡を引き、その度に溜め息をつきながらみんなでそれを見た。

虎の子みたいに大事にしてきた、艦爆「彗星」を特攻機として送り出すことになった。

同年代の若い兵士が、二五〇キロ爆弾を機の胴体につけて、三機程の編隊を組んでは北に向かって飛んで行った。

何回も何回も、飛行場でそれを見送った。翼を振りながら別れの挨拶をする編隊を見つめながら、なぜ神風のような台風がやって来ないんだろうと、台風の襲来を心から祈ったものだ。戦争はやってはならない。

地方自治の移り変わり

―蝦夷地から北海道へ―

産業の状況

蝦夷地に住んでいる人達の生業は漁業が主でしたが、中でもニシン・サケ・コンブの三品が盛んで、マス・アワビ・ナマコ・タラなどがこれに次いで特産品でした。

この外、ラッコ・アザラシ・オットセイ・シカ・クマなどの毛皮や、クマの胆などが主な交易品でしたが、その産額は多くはありませんでした。

また一時期、福山（松前町）周辺で砂金の採取が盛んに行なわれたことがありましたが、数十年程で絶えてしまい、今も桧山支庁として名前が残っているヒノキ（桧＝実際はヒノキの仲間のアスナロ・ヒバ）も伐採が進んで、それも次第に減ってしまいました。

農業もムギ・アワ・ヒエ・マメなど穀類の外は、自家用の野菜類がわずかに作られていましたが、畑仕事の多くは婦女子の仕事でした。

馬は手数のかからない野山に放し飼いで、自然に繁殖しますが、荷駄（馬の背に荷物をつける）として利用するぐらいで、牛も農耕用としてわずか飼われていましたが、アイヌの人達は全く牛馬を飼うということはありませんでした。

また、蝦夷地に何とかして農作物を栽培したいと、江戸中頃の農学者として有名な佐藤信景が、ひそかに数人の門下生と共に厚岸に渡り、そこで農作物を試作して、その収獲物を差し出し松前藩に開拓についての意見を述べたところ、逆に藩政を乱す者だとして追放されるという始末でした。

しかし、蝦夷地での一番の悩みは、この広い土地を持ちながら慣れない気候に災いされて食糧が自給できないことでした。

快風丸の蝦夷地探検

ここに痛快な一つの物語が伝えられています。

本州の人々にとって蝦夷が島はまったく未知の島、いわば外国にひとしい遠い島でした。貞享四年・一六八九年のことですから三一五年前になります。

今もテレビで人気のある水戸の黄門さま・徳川光圀が、水戸藩の大船快風丸でその蝦夷が島の探検を試みたのです。

六〇余人の乗組員と、その頃としては最新の海図・コンパス・天測機などを用意して那珂湊（なかみなと）を出発しました。しかし、松前藩によって蝦夷地への航行は拒絶されて、勇壮な希望も空しく帰ることになりました。

しかし、あきらめないところが黄門さまで、翌元禄元年に再び出航し、今度は印籠ではなく松前藩主に多大の贈り物をした後石狩まで行き、四〇日余りにもわたって周辺を調査し、アイヌとの交易も行ないました。

このときに、漂流して流れ着き、アイヌ人と結婚して土着したという和人が一〇数人も生活していたことが伝えられています。

快風丸がこのときに持ち返った資料が、その後の蝦夷地研究に大変役立ったといわれています。

蝦夷地の研究

先の快風丸がもたらした資料や、松前藩の幕府への報告などから蝦夷地への興味や関心がにわかに高まり、蝦夷地に関する有名な学者による本も次々と出版されるようになりました。厚岸に渡って農作物を試作したという佐藤信景も、その影響を受けた一人でした。

そして未知の島・蝦夷が島の様子もだんだん人々の知るところ

となってきました。

それにつれて蝦夷開拓論も盛んになり、未開の蝦夷地を開いて日本の国を広くすべきだ。蝦夷地は農業が不可能というが工夫すれば可能である。金銀が豊富なので、開拓の資金を得るためにも金銀鉱山を開くべきだ。など多くの意見が出ました。

これらは、幕府の体制もこのままではどうも行き詰まってしまうので、蝦夷地の開拓によってこれを打開しよという経済的な考えから生まれたものでした。

北方からの脅威

蝦夷地のことが、さらに旅行者などによっても本州の人達に知られるようになると、いっそう蝦夷地への目が向くようになりましたが、幕府にとって、蝦夷地のことがそれほど重要な問題だとは考えていませんでした。

ところがここに、幕府をあわてさせるような問題が起きました。それは北蝦夷地と呼んでいたカラフト、千島方面へのロシアの南下でした。

その頃、ヨーロッパで急速に力をつけてきたロシアが、それまでほとんど関心の無かった東方（シベリア方面）へ、領土の拡大を目指して進出し始め、日本に対して交易を求めるようになってきたことでした。

それに加えて海獣を捕獲する目的で、アメリカの船もしきりに近海に出没するようになってきたのです。

幕府もことの重大さから、幕府の役人を辺境の地にも派遣するようになり、要地には勤番を置くなどして、蝦夷地での和人の統制を強化しました。

⇧ 当時、ロシア人のことを赤蝦夷と呼んでいました。樺太対岸に住む山丹人の服を着たロシア人（当時の本の挿絵）

ちょうど江戸時代の中頃は、世界の強大な国々が南太平洋方面で植民地の領有で争っていましたが、蝦夷地を含めた北太平洋方面の事情がだんだん分ってくると、彼等は活動の舞台をこの方面に移すようになりました。

蝦夷地の太平洋沿岸はあまり知られていないことから、これらの外国船が調査のために蝦夷地の沿岸に姿を見せるようになり、港に停泊して燃料の薪や水を補給していました。

このような状況を見て幕府は、ヨーロッパの航海術が非常に進歩していて、いつ、どこから外国船が来てもおかしくない状況になっていて、もう日本は孤立した島国ではなくなったことを思い知らされたのです。

このようなことから北方の問題は国民の関心や注意を引くようになり、その対策を求める声が高くなりました。

幕府の直轄

しかし、松前藩ではニシンの不漁もあり、財政面からもこの難局に対処していくのが困難でした。そこで幕府は寛政一〇年（一七九八）、東蝦夷地を松前藩から一時召し上げて、直接、幕府が東蝦夷地を治めることにし、七〇人余りの役人を派遣して、担当区域の統治に当たらせました。その後、松前藩の方から、知内以東の地も合せて統治してほしいとの申し出があったので、その区域はさらに広がりました。

東海岸を統治する目的は、この地を南進して来るロシアの手から守ることでした。このための警備体制として、津軽・南部の二藩に命令して藩兵を五百人程ずつ派兵することを命じました。

その後も緊急に東北の諸藩から派兵されましたが、道東の寒冷の地で、充分な準備もないまま警備で越冬し、斜里の津軽藩では、一〇〇余人のうち実に七二人が病死するなど、各藩とも多数の犠牲者を出しました。

ちょうどこの頃、東北地方には天明の大飢饉があり、蝦夷地派兵は諸藩の財政を大きく圧迫しました。

戦中 中弾

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後 後弾

吉野慶一郎

順調な開幕に思わず涙　多くのロシア民謡の中から『赤いサラファン』『カリンカ』『トロイカ』『カチューシャ』ほかの独唱や合唱、また演奏と、何れもこの半月程の猛練習で鍛えられた成果を見せるべく、ただ真剣そのものでした。

開幕からまことに堂々たる出来栄えで、出演中は夢中でしたが、一種目終わるごとに思わず涙が出そうになりました。

故郷を遠く離れて戦争にかり出されたソ連の兵士達の心に、日本人が歌う祖国の歌がどんな思いで響いたのか、兵士達も躍り上がらんばかりの喜びようで、口々に何か叫びながら万雷の拍手でした。

会場の中はいつしか"日ソ友好音楽会"の熱気に溢れかえり、暫くは異常ともいえる雰囲気に包まれていました。

これが、つい二か月前に戦火を交わした両国の人間同士なのか？　何か夢でも見ているような錯覚さえおぼえました。しかし、明日からはまたどのような試練や運命が我々日本人には待ち受けているのか、情勢を見ると決して予断は許されません。せめて今夜限りの、これは別世界だと思い、心残りなく楽しもうと意を決したら、今後への元気がまた沸いてきました。

生涯の晴れ舞台に大満足　そしてついに私の出番が廻って来ました。

先に出演した仲間は、何か別人とも思える程上手であっただけに、気おくれが感じられ、どうも落ち着けませんでした。

「落ち着け…落ち着け」と、心を静め、自分を励ましながら舞台に出て見渡したら、なんと一人一人の顔が見えたことで安心し、やっと心の落ち着きを取り戻すことが出来ました。

曲は私の好きな『ボルガマーチ』でしたので、練習どおり順調に、曲の中に溶け込んで演奏することができました。弾き終わってホッとしたら思わぬ拍手に、急に肩の荷が下りたような感じでした。

「ありがとうございます」という気持ちをこめて頭を下げ、舞台から引っ込もうとした途端、前の席にいたソ連兵から、

「もう一回やれ！」

と、大きな声が掛かり拍手が止みません。

「もう一曲」と言われても、最初からこれ一曲だけを集中して考えていたので、しかも突然のことなので頭の中もボーとしてオロオロしてしまいました。

そしたら先生が、

「儀礼として、何か一曲をすぐやりなさい」

と声をかけてくれましたので、先にバンド演奏でやった、覚えたての『カチューシャ』を弾いて、どうやら役目を終えましたが、終わった時はびっしょりの冷や汗でした。義理でしょうが拍手が続き、何となく満足感にひたりました。

後にも前にも、私にとってはこの時が一生に一度の晴れ舞台でした。このときのカチューシャとボルガマーチは、今も鮮明に頭に焼き付いています。

観客と一体　和気あいあいの

静かに幕　うちにプロも終盤に入り『誰か故郷を思わざる』の熱唱には客席も手拍子で盛り上がり、望郷の念がさらにつのり涙が頬を伝わりました。

締めくくりは前回大好評の『さらば野田町』ですが、客席も総立ちになっての涙の大合唱となりました。

照明が次第に暗くなり、名残尽きない情景の中で静かに幕が下りましたが、興奮の余韻はなお暫くは漂っていました。

こうして《第二回白樺楽団コンサート》は、大成功のうちに終了することができました。

連作

吉野まるて

坂本甚衛

地底からの声　1

先日、吉野慶一郎氏と談笑していて、ふと心に沁みる話を耳にした。

旧知の工藤政三氏が他界した噂は以前から聞き及んでいたが、その墓が一風変わっていて、墓碑銘に一首の短歌が刻んであるというのだ。

私は詳細を知りたくなった。早速、工藤氏の弟で以前漁協に長く勤めた政美氏に、墓の正確な所在地を教えてもらおうと思った。ところが訪ねる度、氏は不在である。そうするうち偶然、ある人が工藤氏の墓を見つけ通報してくれた。

猛暑が去った盂蘭盆の十八日、それじゃぁと私は重い腰を上げ墓参かたがた訪ねてみることにした。ひと頃の酷い暑気はやや下火にになったとはいえ、ジリジリと残暑が私のTシャツを灼く。道路脇に立つナナカマドの葉が早くも黄に染まり初め、円（つぶ）らな鬼灯（ほおずき）に似た朱い実が、あるか、無きかの微風にそよいでいた。

禅源寺裏の坂道を、私は余り強靭でない足腰を庇いゆっくりと辿る。墓参りする男女達が石塔のあちこちに見え隠れする。やっと発見した工藤家の墓は、愚妻の実家の墓がある左方の古い墓地群とちがって右手の奥、比較的新墓ばかりが集う一画にあった。

「先祖代々之墓」とある右脇に黒御影石の"墓誌"が直角方向に建てられ、物故者の戒名が四柱並んで記されていた。一番端「光仙院寿岳政道居士」とあるのが政三氏である。その裏面、舗装路側に面して彼の作になる短歌が一首認められてあった。盆に入り朝毎続けし墓参り

来年も来るぞと亡き汝（なれ）に云うとある。掌を合わせ額ずく私の脳中に、かつて余市から古平祭りの写真撮影に来た際の模様が鮮明に思い浮かんだ。渡辺金物店横の十字路で神輿一行の渡御を写していたら、自宅の扉を開けて出て来た政三氏が、曖昧に照れたような横顔を見せ、缶ビールと大関のワンカップを「飲んだら・・・・」と差し出してくれたっけ・・・・。

抑も日本独自の俳句や短歌という一種の短詩形スタイルは作ろうと思えば、誰でも手軽に作れる。だからといって、人を納得させる作品が一朝一夕に出来るというほど底の浅いものでもない。その難問の遠因は七、五調の短い区切りの中で最も適切な比喩を駆使するか、または自己の内面を探り、凝縮したような華ある語句で表現しなければならぬからであろう。

こうした制約を通り抜け発酵させ結実した秀句、秀歌は万人の共感を呼ぶに至るだろう。俳聖芭蕉の王道も、正岡子規の展望も、はたまた近代和歌の斉藤茂吉における静謐も、反局面にある中条ふみ子の壮絶も、みな一日にしては成らない。すべてはその人間の内包する類い稀な感性のエッセンスであり、一途な精進の結果から紡ぎ出された韻律に他ならないと私は思う。

工藤政三氏の歌は　一言で言えば、雑誌や新聞の歌壇に見られるような趣きとは立場上全く異なる。目新しい気負いや他人の賞賛を期待する衒いも一切無い。あるのは平易な語調で綴られた、近親者の霊に対する真摯な心からの呼びかけである。彼の吐息である。

人間如何に生くべきか、の命題を問うた果てに洩らされた大きな嘆息とも私には見てとれた。

期せずして訪れたお盆というこの世の仕来り事に、私は何か運命的なものを感じ敷地を後にした。合掌。

〈訂正〉先号13ページ最後の行「六月五日」を「六月十五日」と訂正いたします。

両親が希いを託した『藤蔵』という名前

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所　勤務）

私の名前は『藤蔵』。
昭和五年生まれ。
他人は「変な名前」「古風な名前」と言う。
しかし、私の名前には親の希いが込められているのです。
私の両親は、農・林・畑・漁業を営む農・漁村の恵まれた家庭に生まれた。
特に母方は、村の肝煎をつとめ、自ら斬新な漁獲法を考案し広く村民にその利を広め、その功を讃えられ、村民の寄進によって、生前にして顕彰碑を贈られるなど、村民の人望を得ていたようだ。
母は、女二人姉妹の次女として生まれた。
父は、男二人・女二人の次男で、山林や畑を手広く所有する家庭に生まれた。
両家とも、今様に子供への財産分与をしても充分生活が成り立つ程の財産を持っていたのだが、その当時は、家業と財産は長男が継ぎ（女姉妹の場合は長女）、家を離れた兄弟は、自分の力量で家庭をつくり、生活を支える以外になかった。
また、それが当然の事として伝承されていた。
両親も例外ではなかった。
結婚後、村を離れ、近くの小都市（酒田市）に居を構えたものの、土泥と海しか知らない両親には、頭や知技を使う都市型の仕事は全く出来なかった。
いや、出来る筈がなかった。

当時の世相は、不況の真っ最中で「大学は出たけれど…」の大失業時代だった。
その日その日の生活を強いられた我が家は、やむなく、父が北海道の増毛に出稼ぎに出かけた。ニシンの豊漁でニワカ成金で賑っていると伝え聞いたからである。
思いを膨らませて増毛に行ってはみたものの、成金は網元の旦那衆だけで、出稼ぎ者にはその恩恵は回ってこなかった。
散々の思いで酒田に戻ったのだが、貧乏に追い討ちをかけるように、隣家の火災で全焼の憂き目に遭い、無一文のドン底生活に転落してしまった。
そんな時、未熟児で四番目の私が生まれた。次男だった。
裕福な家庭に生まれた両親でさえ、次男・次女（女姉妹の）だったが故に、親からの財産分与もなく、典型的な貧困を強いられたのに、貧困家庭の次男に生まれたこの子（私）は、もっともっと苦労するに違いない。
せめて、名前だけでも希望のもてるものにしようと、父親・藤太郎の「藤」と、大きくなったら大きな蔵を建てられる程に成功して欲しいとの思いを込めて「蔵」をつけ『藤蔵』と名づけられたのが、私の名前の由来と教えられた。
だから、他人は何と言おうと私にとっては、両親が将来を託してくれた「唯一無二」の名前なのです。

×　×

親の希望には程遠い人生となったが、わが子の成長を名前に託した親の心情に思いを馳せながら、それなりに幸せな日々を送っている昨今です。

軍旗祭

～続く

連隊旗手の奉持した軍旗が中央の台上に上り、いよいよ行進開始だ。ラッパ手が行進の先頭に立ち、緊張の一瞬、中川教官のタクトがさっと振られ行進が始まった。

八〇名のラッパ手が二交替で、行進曲を吹奏しながら軍旗の前まで進み、向きを変えて軍旗の真正面に止まる。これは繰り返し何回も練習したのでうまくいった。あとは全軍が行進の終わるまで吹き続ける。

この日は連隊を開放して気屯の人達も連隊の中に入れ、在郷軍人・警防団・女子青年団・小学生なども行進の列に加わり、いっしょに行進して盛大な軍旗祭となった。

気屯の人達も初めて見る兵舎や、堂々と行進する兵隊を見て大いに感激した模様であった。夜は恒例の酒とご馳走が出て、中隊を挙げての宴会となった。軍旗祭だけは無礼講がしきたりである。今日だけは上も下もない。大抵のことは大目に見てくれる日だ。

歌や踊りが出て宴会も盛り上がったところで、中村中隊長を皆で胴上げした後、中村中隊長やほかの士官たちはそれぞれの部屋へ引き上げて行ったが、ただ一人最後まで残っていたのが、幹部候補生出の某少尉だった。

この少尉はいつも兵隊の前で威張りくさっていて、古年兵からは特に憎まれていた。今日は無礼講である。この少尉、今日は危ないと思って見ていたら、案の定、軽機関銃班の上等兵が、いきなり少尉に頭から毛布を被せて組みついていった。側で見ていた兵隊たちが、

「ヤメロ！　ヤメロ！」

と、止めるふりをしながら寄ってたかっていっしょになって押えつけ、日頃の恨み思い知ったか、とばかりげんこつを固め散々殴りつけた。それからランプを消し、真っ暗になったところで首謀者を逃がしてから、皆で知らんふりをしていた。

そうこうしているうちに、騒ぎを知ってびっくりした坂東准尉が飛んで来て、

「もういいだろう、もういいだろう」

と言って皆をなだめ、どうやら騒ぎは収まった。

「ざまァーみろ、エーだ。」

ところが、この騒ぎの中にもうひとつの事件があった。

皆が騒いでいる最中に将校室へ忍び込んだ兵隊が、くだんの少尉の革の長靴と思い込んで、その靴を薪ストーブへ投げ込んでしまった。

翌日になって当番兵が、中村中隊長の長靴が無いことに気づいた。散々探したが見つからない。ふと薪ストーブのふたを開けてみてびっくり、そこには長靴が灰になって残っていたが、後の祭りである。中村中隊長もとんだとばっちりを受けたものである。

中村中隊長は立派な人であり、皆から尊敬されても恨みを受けるような人ではない。『何事も真心で』ということを座右の銘としている人である。

このことを当番兵から聞いて、中隊長への同情の声がささやかれた。誰がやったのかはとうとうわからなかったが、私には大体の見当がついていた。

私の班の上等兵であろう。この話が皆に広がったときに、彼はただひとり何にも言わずニヤニヤ薄笑いを浮かべていた。日頃の彼の言動からして、私には何かピンとくるものがあった。いくら無礼講とはいえ、中隊長には気の毒な一件であった。その後間もなく、くだんの少尉は他の中隊へ転属となり、厄介払いとなった。

（続く）

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

22

橘　義春

教科書のいま～むかし

◇寺子屋の始まり　～続く

その後、江戸時代になると、江戸には幕府があり、日本の中心地として江戸は繁栄し、現在の東京と同じように人口が集中し、人口は百万人を超えたといわれます。

そうなると江戸・大阪を中心にして商業活動が盛んになり、そのための機能を働かせるために帳簿類が重要になり、「商売の家に生きる者は、幼時から手習い、算術を習うことが肝要」だったのです。

このように文字に頼り、数をうまく使えなければ生活が立ちゆかなくなる、次第にそんな時代になってきたのです。

その頃の農業にかかわる人達も、ただ働けばいいというものではありませんでした。

『百姓嚢（ひゃくしょうぶくろ）』という本には、「百姓といえども今の時世にしたがい、おのおの分限に応じ、手を習い、学問という事を人に聞きて心を正し…」とあります。

また、農民用の寺子屋教科書として『百姓往来』などの本が使われていました。

こうした状況から、庶民の日常生活においても文字の必要性が次第に高まってきたことが、寺子屋の増加をいっそううながしました。

◇『百姓往来』を読む

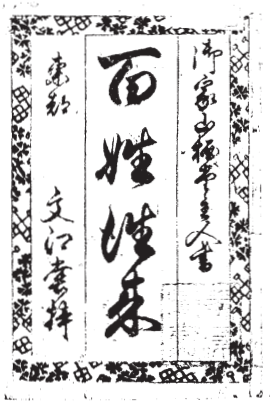
同じ頃『商売往来』という本が盛んに利用されましたが、これは名前のとおり商人用のもので、農民用としてはこの『百姓往来』（明和三年・今から二四〇年ほど前）が代表的なものといえるでしょう。

その内容は、農民の生産と生活とに必要な品物について、読み書きができるように、そして教訓的なものとして、支配者である幕府への服従を教えています。

毎年納める「年貢米などについては、青米や赤く変質したもの、砕けたものなど無いように吟味する」ことや「俵をしばるときには念を入れ」させ、「未進米（年貢が未納）の無いように心がける」などと教えている。

当時は商品経済が発達して、商人に比べて武士の生活は苦しかったので、それが農民からの年貢の取立てに反映していたことがわかります。

「日頃からご公儀様（徳川将軍）を重んじ、土地のお代官を敬い奉り、身分をよくわきまえる」農民にしようとしていたのです。



農民は「家の造作にくぎなどは使わないで、丸太で掘建て」た家に住み、「日常の主食は陸稲（畑で作る稲）、挽き割り麦などとし、ほかの穀物も飢饉（ききん）に備える心得」を第一にするよう教え、「茶菓子は麦こがし、いりごめ」を用い、客には「餅、うどん、そば切り、または池や沼の魚を取り、菜園の野菜、手作りの酒（どぶろく）でもてなすべし」などとあります。

ここでは自分達のためというより、ひたすら年貢を生産し、それを納めるだけが農民である、という農民の立場だけが強く出ています。

これに比べて『商売往来』では、「余裕のあるときは、それ相当の楽しみもするように」とあって、農民と商人に対しては著しく対応の仕方が違っているのが特徴です。

その後も『農業往来』という名前の本がいろいろ出ていますが、どれも農民に労働と耐乏を説いた上で「**年貢の上納を怠ってはならない**」と教訓をしています。徳川封建時代の体制が、相当に危機に直面していたことがうかがわれます。

短歌

古平町岬短歌会

緑吹く風ありて憩ふ丘の上ジェットき三機がとどろきてゆく
池田　テル

盆すぎて風の涼しさ夕早く爪切り草は花を閉ざしぬ
鈴木　時子

病室の友らと唄ふ七夕の歌只に一つの願ひをこめて
竹内　コト

中学時代に早もどりたるクラス会ホテルは直ぐに教室となる
田中　香苗

しぶしぶと入りし岬短歌会日記と思へと姉に諭さる
寺内　りょう

丹精のサルビアは緋に炎え盛り老二人住む家をいろどる
東　美知

稲の穂を啄む雀ら追はれをり仕掛けし雀おどしの音に
堀　典子

俳句

古平俳句会

再会を約し別れや盆の月　斉藤波留

人力車ゆるゆる駆て汗しとど　山口悦子

夏霧の山を包みし温泉郷　越野敏雄

客集ふイカ飯どっともてなせり　大和田絵伊

秋空を映して小さき庭の池　福井幸平

立ち止まり火箸風鈴とき感じ　高橋重子

礁を打つ波も初秋の音荒し　室谷弘子

木造の借家の風や夏涼し　泉　清三

海渡る風のざわめき秋の彩　外山俊久

星冴えし北斗の空に出し月　渡辺嘉之

波うねり舟揺すりゆく秋蒼し　堀　典子

海原の底の底まで西日射す　越野清治

―先月号・お詫びして訂正いたします―

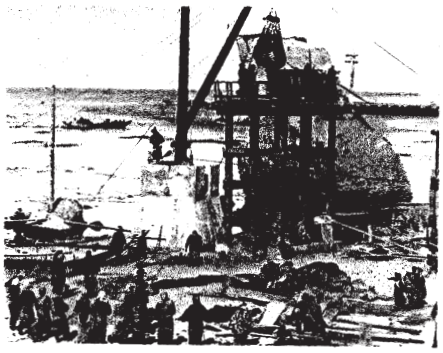
正　我の身に馴じみの深し単帯　大和田絵伊

誤　我の身に馴じみの深し単衣帯　大和田絵伊

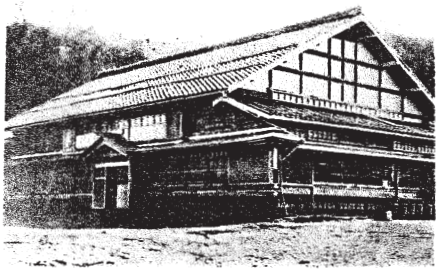
古平町史年表

昭和９年　(1934)　～続く

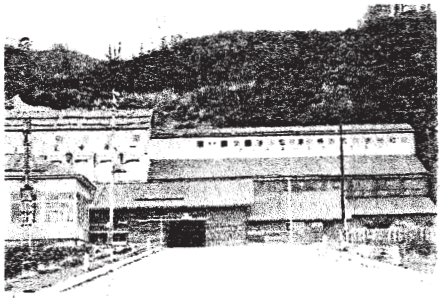
▲ かぜが流行し、古平尋常高等小学校では５日間臨時休校をする
▲ 凱旋祝賀会を第29回陸軍記念日を記念して開かれる
▲ 新開町の武田典町長宅から出火して、住宅と雑倉を焼失して鎮火する
▲ 部落会や婦人会が函館大火(3/21・２万余戸焼失)の救援のため、古着や義援金を集める
▲ 沢江村△仲谷勇五郎漁場でウィンチを設置する
▲ 雪解けの４月、沖村海岸道路で氷が落下し、沖村・清水美代が死亡する
▲ 稲倉石鉱業所が港町に事務所を開設し、同時に貯鉱所を設置する
▲ 港町で腸チブス１１人とジフテリア５人の罹患者が出て、内５人が死亡する。汚染された井戸水が原因であった
▲ 皇太子殿下のご生誕を祝し、町が記念植樹をする
▲ 町がトドマツ５万本の交付を受け、町有地に植林する
▲ ㋹梅野で燻製工場を建て、鰊の燻製を製造する
▲ 東郷元帥の国葬に、遥拝式が古平小学校で遥拝式が行れる
▲ 産業振興巡回相談会が役場で開かれる
▲ 後志支庁長以下係員が水産・農産・畜産・林産や副業などに分かれて、古平小学校で巡回講話や相談に応じる
▲ 牧田歯科医が借家で開業する
▲ 漁村振興後志水産共進会が開かれる
▲ 禅源寺の観音像開眼法要が開かれる
▲ 古平中央劇場の上棟式が行われ、餅まきに大勢の町民が集まる
▲ 沖尋常小学校が校旗を制定し、村内の住民から校旗を寄贈される
▲ 鉄道建設視察のため、鉄道省建設局の一行が余別までの踏査をする
▲ 郷土出身の阿部房吉大尉の実戦体験講演会と、歓迎会が古平小学校で開かれる



↕蒸気機関を動力としたウィンチと△仲谷漁場



↑初冬の沖村街道を行く



↑港町事務所と貯鉱所（昭和30年代）